

『秋月物語』考

— 『平家物語』の投影とそれを前提とした解釈の試み—

田村俊介

富山大学人文学部紀要第56号  
2012年2月 抜刷

## 『秋月物語』考

— 『平家物語』の投影とそれを前提とした解釈の試み —

田村 俊介

### 序章

本拙稿は、中世文学会平成二三年度春季大会（於鶴見大学）の口頭発表『『秋月物語』考——一方流高野本『平家物語』の作中人物と自然描写の投影——』を礎稿とする。

発表の制限時間二五分間（時間厳守の旨、事前に知らされていた）のうち、私は、『秋月物語』に於ける『平家物語』の投影を立証するために、二〇分以上の時間を費やした。学会発表は、すべからく全会員に向けて話すものである。その道の権威と言われ、研究叢書や文学史辞典等の編者になっておられる、二、三人の先生にわかるように話し、その先生の毀誉褒貶によつて発表の評価が定まるといふような事態はできるだけ避けたい、と初めから思っていた。中世文学の中でも、『平家物語』のような有名な作品はともかく、『秋月物語』は通読していない会員の方も居られると想定してその配慮をし、学術誌掲載論文では使わないような傍線や記号を使い、『室町時代物語大成』のままでは読みにくいと思われたので釈文を作り、多くの方が聞き取れるようなスピードで話すよう心掛けた。それでもやはり、お聞き苦しいところも多々あったと思うが、こちらとしては、そのような心づもりで発表した。それともう一つ、理由がある。四つ、少なくとも三つの類似箇所（本拙稿では第一章第一節から第四節までに相当する）をお示しすべく原稿を作ったことであ

る。『平家物語』には、他のお伽草子や謡曲、口承文芸も含めて数多くの二次資料があり、例えば、一次資料の巻六の「小督」の章段について言えば、実践女子大学文芸資料研究所に黒川文庫蔵『小督物語』という二次資料がある。私の見たところ、一次資料の小督の物語のほうが『秋月物語』の管弦楽器演奏の場面に近いと思うのであるが、仮に『小督物語』の詞章が『秋月物語』のそれと近いとしても、その実践女子大学文芸資料研究所の黒川文庫蔵の文書が女性の入水の場面や富士の裾野の場面の詞章を有していないとすれば、巻六で管弦楽器の演奏の場面を有しているのみならず巻九では女性の入水の場面の詞章を有し巻十では富士の裾野の自然描写の詞章を有しているところの『平家物語』一次資料のほうが、『秋月物語』の先蹤としてはるかに有力な候補なのである。『秋月物語』の女性の入水の場面の詞章は、本拙稿第一章第二節でお示しする通り、『平家物語』巻九の「小宰相身投」の章段のそれと酷似していると私は思うのであるが、女性の身投げと言えば、やはり、飛鳥井女君が文学史上有名である。しかし、『狭衣物語』は、飛鳥井女君の身投げの場面を有しているも、富士の裾野の自然描写を有しておらず、管弦楽の曲名に拠って演奏者の気持ちを察する記事も有していないから、『秋月物語』の出典として、やはり、『平家物語』以上に有力な候補には成りえないのである。『平家物語』の投影を論証するに当たって、このような論証の方法を採りたかったため、類似箇所を一つや二つだけにとどめるわけには行かず、時間的には、二十分以上を費やしてしまった。

『平家』投影の現象を『秋月物語』全体の把握にどう活かすかを述べた残りの約三分では、平安時代の貴族への憧れを主調低音として、ともすれば『源氏物語』の後継作品と見做しがちであった『秋月物語』研究史を批判する言説を述べさせていた。『源氏』の影響を受けた箇所が皆無であると言ってしまうは過言であろう。が、『平家』の後継作品と見做したほうが、より『秋月』の真骨頂に迫ることになる、という見通しを私は持っていた。しかし、そのような見通しに「賛同いただけるところであれば、やはり、『秋月』一編の通読を経て「賛同いただくのが私の本意であり、その意味で、制限時間にかかわらず、このような内容は口頭発表には向かなかったのかもしれない。本拙稿においては、第二章で述べる予定である。

なお、第一章に話が戻るが、第五節では類似する詞章が一行程度の箇所を集めた。その一行だけ見れば、『平家』投影という私見に納得いかない向きもあろうが、その、たった一行が置かれている状況、前後の文脈も含めてご判断いただければ幸いである。全国、ど

の都道府県にもある『室町時代物語大成』第一巻の、頁数、上段下段の別、行数も逐一併記しておくのもそのためである。

## 第一章 『平家物語』の投影

### 第一節 管弦楽器演奏の場面

『秋月物語』中盤のあらすじを簡条書きでお示しすると、次の通りである。

- I 愛敬の姫君、継母の指令を受けた武士たちに抛り、拉致される。死は免れたものの、讃岐国の蛭が小島で、一人、途方に暮れる。熊野詣での帰途漂着した秋月在住の尼君が発見、秋月に連れ帰る。
- II 中将（行家）、愛敬の姫君を探す旅に出る。その行く先は、夢のお告げに従い、九州にする。
- III 中将、九州上陸後に、冠者（実は観音）の教えに従い、行く先を秋月にする。
- IV 中将、秋月にて、愛敬の姫君と再会。
- V 中将、すぐにも帰京を思い立つが、愛敬の姫君は「年内は波風が激しい」と進言、秋月で新年のお祝いをする。
- VI 中将、愛敬の姫君を連れて、帰京。

この中で中盤全体、というより、作品全体のクライマックスは、IVの場面であるので、やはりこの場面から論を進めて行こう。

中将は、姫君の御ゆかしさに心を澄まして、御腰より横笛やうふえを取り出し、黄鐘調に調子を取り澄まし給ひて、迷恋路（☆）と言ふ樂を二三返、吹き給へば、姫君、聞こし召して、「あら、不思議や。中将の月見の御所にて、吹き給ひしに少しも違はず」と思し召して、「同じ樂をこそ吹き候はん（☆）、優しさよ」と聞き給ふ。尼君は、笛の音ねを聞き給ひて、「不思議や。この人は、恋路に迷ふ人なり。迷恋と言ふ樂を、吹きぬる不思議さよ」と耳を敬てて聞き給へば、

（『秋月物語』の引用は、『室町時代物語大成』に拠る。<sup>2</sup>この叢書の叢書名を室町大成と略称することもある。『秋月』掲出の際には原則として、釈文に直す。但し、☆印の個所は校訂した）

このうち、底本で「ふく候はん」とある箇所は、「吹き候はん」と校訂した。「迷恋路」とある箇所も、底本では「めいれんろう」であったのだが、他にも底本で「笛、琴にて、恋路にまよひ、くたり給ふよしを、哥によみ給ふ」「むかし、少なこんの、恋路にまよひ給へる」(前者は一八九頁上段六く七行目、後者は一四七頁下段六く七行目。ここでは、『室町大成』の表記のまま掲出した)とあることだし、『室町時代物語集』第三<sup>3</sup>所収矢野本の「めひれんろ」という本文を採用して、釈文を作る際には「迷恋路」とした。しかし、高山歙喜寺蔵本でも室町大成一九五頁上段九行目の「ゑんしろうの月」は明らかに「燕子樓の月」<sup>4</sup>であろうから、それと同じ「樓」という漢字を宛てて、「……迷恋樓と言ふ樂を二三返、吹き給へば、……」という釈文を作るのも充分に一つの選択肢たりうる。いずれにせよ、男が苦難を伴う恋に一途になっている、その思いがこもっているような曲であったことは容易に想像出来る。

さて、愛敬の姫君は、月見の御所、即ち都にある自分の実家の自室に中将が通い婚していた際に、笛の演奏をするのを耳にしていたから、九州まで来ているという事実には半信半疑ながらも、その音楽的センス、演奏技法から演奏者が中将だと推定する。一方、音楽通であり、この曲も知っている尼君は、愛敬の姫君に言った詞のうち、

……此人はわさと、身をやつしたると思ひ候、夜もすから聞候へは、笛、琴にて、恋路にまよひ、くたり給ふよしを、哥によみ給ふ、あやしくて参りて候也、誰につゝみ給ふへき、はや御かたり候へ  
(一八九頁上段五く八行目)

の部分からわかるように、笛を吹いている男性が恋に迷っているからこそ「迷恋」と言う言葉をタイトルに持つ曲を演奏していることを見抜き、その恋の相手が愛敬の姫君であることにも薄々は感付いているようであるが、このように曲が手掛かりとなって男女の再会につながるという趣向は、私は、『平家物語』巻六「小督」<sup>5</sup>で、仲国が高倉天皇の使いとして、嵯峨にいる小督を探し出す場面から学び取られたものである、と私は考える。

……片折戸したる内に琴をぞひきすまされたる。ひかへて是を聞きければ、すこしもまがふべうもなき小督殿の爪音也。樂はなんぞと聞きければ、夫をおもふてこふとよむ想夫恋といふ樂也。さればこそ、君の御事思ひ出まいらせて、樂こそおほけれ、此樂をひき給けるやさしさよ。<sup>6</sup>

都で小督と合奏したことがあり、彼女の音楽的センス、演奏技法を誰よりも熟知している仲国は、まずは、演奏者を小督だと推定す

る。曲名が何であるかを知ったのは、それから一呼吸置いた後である。一呼吸置いた後、曲名が「想夫恋」だと知った仲国は、彼女が今でも「夫を想っていること」、即ち、高倉天皇への思慕の気持ちを見失っていないことを見抜き、それが「やさしさよ」という賞賛の言葉を産み出すのである。

このように、愛敬の中將認識の場面と、仲国の小督認識の場面は、演奏者の楽器が違うだけでほとんど一致するのであるが、実はここから一頁弱後に、愛敬も『平家物語』の小督と同じく琴を演奏する場面がある。

琴ひきよせて、想夫恋と言ふ樂を、二三返、弾き給へば、

(一八七頁上段一八行目〜下段一行目)

この場面での曲名が「想夫恋」であったことは、『平家物語』引用を立証する最後の決め手となるだろう。

参考までに、八坂流（八坂系）の本文は、

〈中院本〉

……かたをりとのうちに、ことをそひきすましたる、すこしもまかうかたなく、こかうのとのゝつまをとなり、かくはなにそときゝければ、おつとおもひてこふとよむ、さうふれんをそひかれける、いとおしやくこそおほきに、此かくをひき給事のあはれさよ、此人もいまた君の御事を、わすれまいらせられさりけりと、うれしくて、

〈城方本〉

……かた折戸・したる内に・琴をぞ・ひきすましける・少も・まがふべからず・小督の殿の・爪音なり・樂は・何ぞと聞ければ・男思つて・戀ふとよむ・想夫戀をぞ・ひかれける・樂しもこそ・おほきに・只今・この樂を・ひき給ふ事よ・仲国いとほしや・此人も・いまた君の・御事をば・思召・忘さりけりと・うれしくて・

であつて、「やさしさよ」やそれに類似する本文を持たない。『秋月物語』では、何がすぐれているのかについて若干のずれが生じているとは言うものの「優しさよ」という詞章を持っているので、『平家物語』諸本の中で『秋月』に近いのは、わずかな差に過ぎないながらも一方流（一方流）の本文だと見做すことができ、次節以降も、『平家物語』の本文の掲出に当たっては、一方流（一方系）高野本を底本とする新大系を優先的に使用して行くこととする。

## 第二節 帰京の途中の場面と巻九「小宰相身投」

次に、第一節のあらすじの表示で言えばⅥの時期、中將が秋月から都へ帰る旅の途中の一場面に注目しよう。

その道筋の途中で、行きと同じく赤間（山口県下関市）『平家物語』読者にとつては、壇の浦の戦いの舞台としてよく知られている）に立ち寄つたのであるが、赤間の遊君たち、なかならず千松御前は、中將との別れに意気消沈するのであった。そこで、中將は、彼女を船に載せることにした。

ところが、備後の国に到着し、一行が更に東に進もうとする際、どういう風の吹き回しか、千松を赤間に戻せ、という命令が中將から下された。その後、千松はどうなったであろうか、そのくだりを見て行きたい。

かくて、十四日、輦を出で給ふが、何とか思召しけん、赤間より召し具せられし千松を、「母の方へ返せ」と仰せければ、大弑殿承りて、日野の五郎に申し付けて、舟をしたてて、送られけり。

千松、（入水自殺の意志を日野五郎に伝える。日野五郎、慰める。その後）日野の五郎は、この程の舟路のくたびれに前後を知らずまどろみければ、千松は、「良きひま」と思ひて、鬢の髪一房切りて、「母に」と書き置き、又、歌を詠みて、「中將殿へ」と置きにけり。頃は四月十六日の、夜半ばかりのことなるに、西をいづくと知らねども、月の入るさをたよりにて、たな心を合はせ、「南無西方弥陀如来、今生こそ、よしなき事を思ふとも、後の世助けおはしませ」とて、惜しむべき齡かな、十七と申すに、底の水屑と成りにけり。さる程に、舟の内には騒ぎて、日野の五郎も驚きて、「こは、いかに」とて、海へ人を入れて、やうやう取り上げけれども、甲斐ぞなき。

（二二〇頁下段～二二二頁上段）  
ここで、『平家物語』で、小宰相と呼ばれる通盛北の方が通盛のあとを追って自殺する場面を引用したい。日にちも二月の満月の頃である。

（小宰相、入水自殺の意志をめとの女房に伝える。めとの女房、一人で死ぬのは止めるよう説得する。その後、めとの女房が）御そばおんにありながらちつとまどろみたりけるひまに、北の方（＝通盛北の方、即ち、小宰相）やはらふなばたへをき出でて、漫まんたる海上かみしやうなれば、いづちを西とは知らね共ども、月の入さいさの山のはを、そなたの空とや思はれけん、しづかに念仏したまへば、沖のし

洲に鳴千鳥、あまのとわたる梶の音、折からあはれやまさりけん、しのびごゑに念仏百返ばかりとなへ給ひて、「南無西方極楽世界教主弥陀如来、本願あやまたず浄土へみちびき給ひつゝ、あかで別しいもせのなからへ、必ひとつはちすにむかへたまへ」と、なくくはるかにかきくどき、「南無」と唱ふるこゑ共に、海にぞ沈みたまひける。(略)とりあげたれどもかいぞなき。

(新大系『平家』巻九「小宰相身投」)

『秋月物語』では「日野五郎」、『平家物語』では「めのとの女房」が自殺をしないよう監視していたのにまどろんでしまったこと、女主人公は、入水する前に「月のいるさ」を西だと思つて念仏する点、死亡を認定する「取あけれ(『平家物語』高野本では「たれ」)共、かいそなき」という言葉を初めとして、両者の類似性は甚だしく、この場面も、やはり、『平家物語』引用を確証するものである。

### 第三節 瀬戸内海での自然描写と巻十「海道下り」

時間は遡つて第一節のあらすじの表示で言えばⅡの時期、兵庫から舟に乗つて九州の秋月へ向けて瀬戸内海を西行する中將が備後の国を通つたときのことである。中將の目に入った風景、そして耳に入った音風景は、

……岸うつ波は、はうくとして、北は、せいさん、かゝとそひゑて、ひやうふを、立たる様なる岩屋は、不動の住給ふかと、たつとくそ、おほえける

松吹風は、さつさつとして、琴ひきならず、心ち也、…… (一六七頁下段1〜6行目。ここでは、底本の表記のまま掲出したであつた。

続いて、『平家物語』巻十の「海道下」で東海道を東に下る平重衡の目に入った風景、耳に入った音風景を引用したい

清見が関うち過ぎて、富士のすそ野になりぬれば、北には青山峨々として、松吹く風索々たり。南には蒼海漫々として、岸うつ浪も茫々たり。

このような、『秋月物語』『平家物語』の自然描写を更に部分部分に分けて、類似性を明らかにしたい。左記の『平家』の詞章の掲出に当たつては、順番通りにする。『秋月』の詞章については、順番を変えて、掲出する。その代り、『秋月』については、行数も併記す



ることにする。例えば、「3〜4行目」というのは『室町時代物語大成』第一巻一六七頁下段3〜4行目という意味であり、「6行目」とあつたら同大成同巻一六七頁下段6行目を意味する。

『平家』 北には青山峨々として、

『秋月』 3〜4行目 北は、せいさん、かゝとそひゑて

『平家』 松吹く風索々たり。

『秋月』 6行目 松吹風は、さつ〜として

『平家』 南には蒼海漫漫として、

『秋月』 1〜2行目 南は、蒼海まん〜として、

『平家』 岸うつ浪も茫々たり。

『秋月』 3行目 岸うつ波は、はう〜として、

このように、今回は注目する行数が一番少ないにもかかわらず、『平家物語』の詞章との一致率が一番高いのである。それにつけても気になるのが、「松吹く風」の擬声語である。新大系は「索々」を、

風の音などが淋しく吹くさま。底本、振り仮名「サツ」。正節本により改める。

と注している。そこで、底本である一方流高野本の本文を、笠間書院発行の影印本を紐解いてみると、<sup>8</sup>

# 松風素々

であり、確かに、「さく」と読むべき「素」という漢字——厳密に言えば、現代人なら「さく」と読みたくなるような漢字——の傍らに「サツ」という振り仮名があった。一方流（二方系）高野本に振り仮名を付けた者は、

サツサツ、と読ませたかった

か、

サツサツ、と読ませたかった

か、或いは、

サツサク、と読ませたかった

か、特定できないが、『秋月物語』作者が『平家物語』読者の一人として前二者のような読み方だと受け止める事態は少なくとも一つの可能性として想定され得る。

他本を紐解いてみると、例えば、八坂流（八坂系）中院本では、

きよみかせきをもすきければ、ふしのすそにもなりにけり、北には、せいさんかゝとして、松まつふく風かぜもさつくみなみたり、さ  
うかいまんくとして、きしうつなみはうくたり、

であった。

『秋月物語』作者は、『平家物語』を見る際巻十については例えば中院本のような本を見ていたのか、それとも、やはり、一方流（二方系）高野本を振り仮名を含めて参照していたのか、どちらかであったのであろう。

陸路を行く平重衡にとって「岸打つ波」とは、進行方向右側、自分の足元に近寄ってくる波であった。海路を行く中将にとって「岸」が進行方向左側、瀬戸内海に浮かぶ島の岸であっても、進行方向右側、本州山陽地方の岸であっても、「岸打つ波」とは自分から遠ざかっ

て行く波である。果たして、同じ音、若しくは、似たような音に聞こえるのだろうか。その前に、船がよほど、島か本州山陽地方の浜辺かに近寄って進むのではない限り、そうした波を見たり聞いたりできたかどうか疑問であるが、純粹な自然の描写としては欠陥になるにも拘らず、先がどうなるかわからない漂泊の思い、荒涼たる心象風景を描き出す上で、『秋月物語』作者にとって『平家物語』の当該部分はどうしても再現しなかった一節だったのである。『秋月物語』には、もう一箇所「……へうくたる嶋に、きしうつなみをと、すさましく、松風さつ／＼として、心をなやまし、へんしもあるへきやうもなし」という自然描写もある（二六一頁下段）。これは本拙稿第一章第一節のあらすじのIの時期のものであるが、『秋月物語』作者にとって、「茫々たり」という波音は「すさまじ」という感慨を作中人物たちに起こさせるものであったようである。

#### 第四節 正月の自然描写

第一節のあらすじの表示で言えばVの時期、秋月で迎える元旦は、次のように叙述されている。

新玉の、年立ち返る青陽のあしたにも成りしかば、東西の風うららかにして、日影のどかに、池の水も溶くるらむとおぼしくて、

（一九六頁下段）

これは、『平家物語』で言えば、巻九巻頭近くの描写と類似する。

青陽の春も来り、浦吹風もやはらかに、日かげものどかになりゆけど、たゞ平家の人々は、いつも水にとちこめられたる心ちして、

（「生ズキノ沙汰」）

但し、「水にとちこめられたる心ちして」だけは、「池の水も溶くるらむとおぼしくて」と、逆転された物語取りと成っている。その理由は、作中人物たちの気持ちの持ちように起因する。『平家物語』の平家の人々は、あの、一一八三年夏、源義仲に越中や加賀で完膚無き迄に負かされて、秋、都を立ち去らざるを得なくなつた。冬に對義仲の軍事情勢を少しは持ち直したというものの、そうして迎えた最初の正月は、人生で最も不幸な正月であつたと言わざるを得ない。『秋月物語』の中將は、八月に行方不明となつた愛敬の姫君をようやく十二月に探し当てた。そうして迎えた最初の正月は、人生で最も幸福な正月と言うことができるのである。

## 第五節 その他の類似箇所

第一節のあらずのⅢの時期、中將は芦屋で下船して九州に上陸、管崎の宿を経て博多を目指すのであるが、その管崎の宿を出て少し行つたとき、そこに管崎八幡宮があるとは知らずに管崎八幡宮に到着する。

松原を行き給ふに、松のひまより、あけの玉垣ほの見えて、前に鳥居ぞ立ちにける。中將、御覽じて、「これは、何と申す神にてましますやらん」と宣へば、(同行していた冠者が)「これこそ、我が朝を守らせ給ふ八幡大菩薩にておはしまし候へ」と申せば、

(一七二頁下段一〇～一四行目)

この場面の詞章は、源義仲が倶利伽羅の戦いを始める前の場面のそれと類似する。

木曾は羽丹生に陣とつて、四方をきつと見まはせば、夏山の嶺のみどりの木の間よりあけの玉垣ほの見えて、かたそぎ作りの社あり。前に鳥居ぞたつたりける。木曾殿、国の案内者を召して、「あれは、いづれの宮と申ぞ。いかなる神を崇奉ぞ」。「八幡でましく候。やがて此所は八幡の御領で候」と申。

(卷七「願書」)

義仲もそこに護国八幡があると知らずに護国八幡に願書を差し上げる機会に恵まれたので、一通りでなく喜んだのである。

続いてⅤの時期、太宰の大式に先払いを命じて一日でも早く都へ帰ろうとする中將に愛敬の姫君が出発を気候がよくなるまで待つよう進言する場面である。ことわざ・慣用句で言えは「勝つて胄の緒を締める」を連想させるような、『徒然草』で言えは「高名の木登り」を連想させるような、愛敬の姫君の慎重さである。

姫君、聞こし召して、「さやうの人は太宰とかやに侍るよし、聞きつるなり。今は(十二月であり)波風激しく、船路の旅もいかが。民の煩ひなるべし。春まで延べ給へかし」と宣へば、中將、「ことわり」とて春へ延べ給ふ。

(一九六頁上段二く五行目)

中將はこのように、愛敬の姫君の進言を受け入れるのであるが、この場面は、藤原成経と平康頼が、流罪を許されて、九州の南の鬼界が島から肥前国鹿瀬庄にいったん滞在し、そこから上京するのであるが、その時期について宰相(＝成経の舅である平教盛)が進言し、成経が受け入れるくだりの詞章と類似する。

……此人々(＝藤原成経と平康頼)は鬼界が島を出て、平宰相の領、肥前国鹿瀬庄に着給ふ。宰相、京より人を下して、「年の内

は浪風はげしう、道の間もおぼつかなう候に、それにて能く身いたはッて、春になッて上り給へ」とありければ、少将鹿瀬庄にて、  
 年を暮す。  
 (巻三「御座」)

このように『秋月物語』の作者は、『平家物語』を十分に読みこなし、自作の物語のその場面の状況に合うように、短いながらも的確な平家物語取りをすることがあるのである。

## 第二章 『平家物語』の投影を前提とした解釈の試み

### 第一節 『秋月物語』先行論文に於ける『源氏物語』重視とその修正

本章本節では、まず、『秋月物語』研究史を概観しよう。先行論文の収集に当たっては、まず、国会図書館雑誌記事索引(「秋月物語」で検索)、国文学研究資料館国文学論文目録データベース(「秋月物語」で検索)、東京堂出版『お伽草子事典』の参考文献欄(「秋月物語」の項)を使用させていただいたが、これらに載っていない論文として、

○藤井貞和氏「御伽草子——「信」の構造——」。

○石井正己氏「秋月物語」<sup>10</sup>  
 などを挙げるができる。

全体の傾向として、この作品を平安文学の後継作品として捉えようという姿勢が看取される。

例えば、本拙稿第一章第一節のあらすじで言えばVIの出来事は、作者のどのような気持ちの表れなのであろうか。この問題について、杉浦明平氏は次のように述べている。<sup>11</sup>

たとえば、山伏になつて恋人の行方をさがしまわる中将が、壇の浦で「かうます」という遊女を一夜の契りを結ぶ【少なくとも、高山歡喜寺蔵本に拠る限り、一夜の契りを結んだかどうかははっきり書かれていない】のはまだしも、苦難のあげくやつと姫と再会して、九州の大名小名を引具して都へ帰る途すがら、赤間ヶ関で長者の娘「せんまつ」に手をつけ【やはり、高山歡喜寺蔵本に

抛る限り、手をつけたかどうかははっきり書かれていない」、「かうます」の妹「かめはか」をも寵愛する（刊本にはこれらの挿話は削除してある）。純愛ものを読んでいるつもりでいると、いつのまにか、ドン・ファンの遍歴談に一変してしまう。二位の中将はもともと好色の御曹司ということになっているにしても、命がけで探しもとめた恋人と同行中の出来事だから、あきれる。しかも作者は、室の泊りでも、遊君たちが中将に「あはれ一夜のなきけを、かけらればやと、おもふもあり、せめて御声のかからばやと、おもふもありけり」と、そのもてかたを有頂天うちよくてんになってよるこんでいる。そのように光源氏のようにあらゆる女に無条件でもててくことは、力も理知も失って古典の中にしか矜持きやうじを見出しえない好色で恥しらずの公家どもの唯一の夢だったのだろう。（一）内は引用者に拠る）

佐藤りつ氏の論文もこれを受けたものである。<sup>12</sup> 佐藤氏は、まずは『秋月物語』の特徴の四番目として、『秋月物語』の筋には関係がないと思われる挿話・記事がかなり多くあり、しかも、長文のものが多くのである」と指摘し、その挿話・記事を①～⑥の番号を付けて列挙するが、

④山伏に身をやつして姫を探しに下り旅をする中将が、赤間関で遊君「かうます」と契りを結ぶ挿話。

⑤やっと姫に再会できて後、都へ帰る旅の途中も「かうます」に会うため寄り、死亡したことを知り、妹の「かめわか」を代りに都へ連れて行くという挿話。

⑥同じく都への上り旅の途中、中将を慕う「せんまつ」が入水自殺する挿話。

に関して、次のように述べている。

……④⑤のような挿話は、都も地位も親もすべてを捨てて、姫を探し求めに旅に出るほどの中将にはふさわしくない感じがある。しかし、作者は⑥も含めて、女性にもてることの喜びを書きたかったのであろうと思う。ここで杉浦明平氏のいわれるように、没落した公家を作者と考えてみると、ぴったりと当てはまるのではなからうか。「光源氏のようにあらゆる女に無条件でもててくことは、力も理想も失って古典の中にしか矜持を見出しえない好色で恥しらずの公家どもの唯一の夢だった」のかも知れない。この④⑤⑥の挿話が刊本にないのは、刊本改作者には、没落公家のこのような夢はずでに時代錯誤になっており、江戸時代庶民には共感を得

られない部分であると考えられたからではないであろうか。

中将と愛敬という一組の男女の純愛を主筋とするこの作品にとって、千松の挿話が無用な夾雑物であると考えるにあたって、杉浦氏らの論文は大変参考になった。しかしこの挿話が入り込んだ背景として、『秋月』作者の男性作中人物造型の意識——中将の美男子ぶり、いかに女性にもてたかを強調しようという——に着目する杉浦氏、佐藤氏と違って、私は、女性作中人物造型の意識に着目したい。『秋月』には、『源氏』の投影が全く無いとは言えない。しかし、もし「憧れ」という言葉を使うなら、『秋月』作者には、『源氏物語』の作中人物への憧れよりも、『平家物語』の小宰相への憧れが強かった。その憧れ場面が自作の女性作中人物の入水の場面に、ほぼそっくりそのまま再現されたのである。

小宰相の入水自殺のような死にざまには賛否両論があろうが、御伽草子以前の有名中長編作品の中で、いざという時に死を選び取る潔さが『平家物語』以上に強調されている作品はそれほどないであろう。自殺するにせよ、敵に首を斬られるにせよ、死ぬ者の側の心理として死への恐怖、生への執着が描写されることがほとんどなく、もし、生に執着するとしたら語り手から厳しく責められたり、自分で自分を責めることになるのである。

潔く死ぬ人間は美しく見えることがある。愛する男性を追って潔く死んだ小宰相への憧れが、一組の男女に抱える純愛ものの筋立てを部分修正してまで、千松入水の挿話を産んだ背景であつたに違いない。

## 第二節 操を守る女たち

愛敬の姫君が秋月に到着して間もなく、絶世の美女だという噂が流れた。九州の大名、小名、中でも大式は早速に求愛・求婚の手紙を送るが、それに対する愛敬の姫君本人や母親代わりの尼君の態度は徹底していた。彼女たちの動向は、中将に、尼君の家を教える「賤が伏屋」の女（一八二頁下段四く五行目で登場）が次のように伝えている。

……かの姫君、「音に聞こゆる人なり」とて、九国の大名・小名の御方より、御文は暇なし。姫君、などやらむ、いつも涙がちに  
ておはするが、ことにさやうの御文などの参り候ふ時はうち臥してのみおはしますが、御命も危ふく見えさせ給ふ程に「尼君、こ

れを悲しみ給ひて、『いかやうにも姫君の御心のまま』とて、御文ども、受け取り給はず」と承り給ふ。又、「今の国司、大武殿と申すがこれを聞き給ひて、明け暮れ、御文通はし給へども、『その甲斐無く候ふ』とて、まことやらむ、人に合はせて、取り給ふべき」よし承り候ふ。尼君は、夢にも知らせ給はず。「この姫君は、さやうのものはば、いかなる淵瀬にも身を沈め給ふべき人」と申し合ひ候へば、「いかなる事か、出で来候はむずらむ」と御いたはしくこそ候へ。……

（一二二頁下段一二行目〜一八三頁上段七行目）

さて、真下美弥子氏は、『伏屋の物語』から『秋月物語』へ——『住吉物語』との関わりを中心として——<sup>13</sup>の終わりまで、秋月に於ける愛敬の姫君の物語に関して、『源氏物語』の玉鬘巻の影響の色濃い一連の筋の運びとしているが、いかがであろうか。同じ「九州男児徹底拒否」でも、『源氏物語』と『秋月物語』では意味が違う。玉鬘の保護者たちが九州男児を拒否するくだりにも強烈な「田舎蔑視」の意識が表れていたが、愛敬の姫君は契りを結んだ中将に「操を立てて」いたのである。

相手の男性が生きていようが死んでいようが、「操を立てて」ようという意識を持つ女性が『平家物語』では目立つ。

例えば、平重衡に操を立てて、彼の斬首のすぐ後に出家、信濃国の善光寺で仏道一筋の生涯を送った千手前。又、壇の浦で戦況を訊かれた際の平知盛の「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ」という女性達への返答は、あなたがち冗談ではなく、自分達男は死ぬが、それにお構いなく、あなたがた女は生きるための選択をしてほしいという思いやりも含まれていたように聞こえるが、女性達は冗談として受け入れず、二位殿（≡平清盛の未亡人・時子）に続いて入水した。

一方では、巻一の「二代の後」の章段に登場した徳大寺公能の娘・多子のように、一度近衛帝に入内した後、二条帝に再入内した女性もいる。

しかし、平通盛の手紙を何度も拒否し乍ら、いったん返事も書いて契りも結んだ後は、通盛に操を立てて入水した小宰相が前者のタイプに属することは議論の余地が無い。その小宰相の人物像が『秋月物語』作者の脳裏に焼きついていたことも確実なのである。愛敬の姫君の人物造型は、やはり、『源氏物語』の玉鬘以上に、『平家物語』の小宰相を含む幾人かの女性作中人物に基づいたものであったのであろう。



## 第三節 『平家物語』の語彙語法

東京堂出版『お伽草子事典』<sup>14</sup>の「秋月物語」の項の【内容】欄には、

「伏屋の物語」をもとに主人公の失踪先を筑紫の秋月へ変更することによって成ったもので、先行するお伽草子から新たなお伽草子から新たなお伽草子が作られていく好例である。前半の場面構成や文章表現には『住吉物語』の影響が強く、中将の秋月下向の道行部分には、「京太郎物語」「文正草子」等に似た趣向や、八幡や天神等の故事縁起をはじめとする多くの説話が見られる。物語の題名ともなっている筑紫の秋月は、地形の上からも大和の初瀬に似た観音の霊場であり、姫君が継母の迫害から非難するにふさわしい地であった。全編にわたり清水寺をはじめとする観音や八幡神、天神等の神仏の霊験が強調されることも、大きな特徴といえよう。

とされている。同事典のはじめには、「お伽草子への招待——序言に代えて——」と題され「平成十四年葉月の末つかたに誌す」で終わる、編者徳田和夫氏の二頁の序文が置かれているが、その二頁目の一四〜一五行目には、

編者はその原稿すべてに目を通して表記等の統一と細目の充足を図り、また必要と判断した場合、加筆を行った。

と記されているから、右の「秋月物語」【内容】欄の内容は、執筆者として署名なさっている真下美弥子氏と徳田氏との共通認識だとということになる。神田龍身氏西沢正史氏編勉誠出版『中世王朝物語・御伽草子事典』<sup>15</sup>には「秋月物語」の項が無いし、今後も、『秋月物語』の研究が進められる際第一に尊重される文献は徳田氏編『お伽草子事典』であろうが、私は、同事典「秋月物語」の項に記載が無い『平家物語』の語彙語法を念頭に置いたほうが解釈が進展する箇所が『秋月物語』の随所にあると思うのである。

『秋月物語』で中将を迎え入れた、愛敬の姫君の女房、正確に言えば、愛敬の姫君を庇護している尼君の女房の中に「小女房」と呼ばれる者もいた（一九〇頁下段一八行目。原表記は「小女はう」）。小〇〇の君は、『源氏物語』「蜻蛉」で重要人物として登場する「小宰相の君」を初めとして、女房の呼称としてよくあるから注意する程のものでもないのかもしれない。新編日本古典文学全集（以下、この叢書を新全集と略称することもある）第六分冊二四五頁では「小宰相の君」、二五六頁では「小宰相」と呼ばれている。しかし、このような小〇〇の君、小〇〇ではなく、小女房という呼称そのものは、私はあまり見慣れていない。

『平家物語』巻六「小督」の章段では、本拙稿第一章第一節で引用した部分の後、仲国は、自分も横笛を抜き出して鳴らし名前も言う。小督はこれらにより、仲国だと気が付いたと思われるのであるが、だからこそなおさら、訪問を拒むという態度を取る。仲国はそれを察して、言葉での説得という方法を止めて、強引に家の中に入り込むことになる。ここで門の開け閉めを仕事とするのが「小女房」なのである。

ありがたふおぼえて、腰コシより横笛ぬきだし、ちツとならひて門をほとくとたゞけば、やがてひきやみ給ひぬ。高声カウシヤウに、「是は内裏ダイリより仲国が御使に参つて候。あけさせたまへ」とて、たゞけどもくどがむる人もなかりけり。やゝあつて内より人のいづる音のしければ、うれしう思ひて待まちどころに、鎖をばづし門をほそめにあげ、いたひけしたる小女房、かほばかりさしいだひて、「門かどたがへでぞさぶらふらん。是には内裏より御使なシどたまはるべき所にもさぶらはず」と申せば、中なかく返事して、門たてられ、鎖さゝれてはあしかりなと思ひて、をしあけてぞ入いりにける。

せつかく『平家物語』を読んでも、参考になる用例が他の作品や『平家物語』の他の章段には乏しいので、「小女房」の「小」が何を意味するか決定的なことは言えないのかもしれないが、推定としては、新全集頭注の

年少の女房。小がらな女房ともいう。

は妥当である。何より門の開け閉めを仕事とする女房であるというのは『秋月物語』の注釈をする上で貴重であるし、『秋月』の積文を、例えば「古女房」としたり、「小」の字を衍字と見做して削除してしまう危険から救う上でかけがえの無い情報なのである。

参考までに、『延慶本 平家物語 本文篇』<sup>16</sup>も、一部、引用をしたい。延慶本の場合、本拙稿第一章第一節で引用した部分について幾つか異文があるが、大きな違いは、一方流高野本では「樂ガクはなんぞと聞きければ、夫ウツトをおもふてこふとよむ想夫恋サウフレンといふ樂也ガク。さればこそ、君の御事思ひ出いでまいらせて、樂ガクこそおほけれ、此樂をひき給たまけるやさしさよ」に相当する「何ナル樂ヲ弾給ラムト閑二聞ケレバ、「思フ男ヲ恋」ト言、想夫恋ヲ被弾ケル。箏ノ音、空ニスミ渡リ、雲居ニヒマク心地シテ、身ニシミニテゾ覺ケル。」の後仲国が門を叩くまでの間、比較的文言が多いことである。

何ナル樂ヲ弾給ラムト閑二聞ケレバ、「思フ男ヲ恋」ト言、想夫恋ヲ被弾ケル。箏ノ音、空ニスミ渡リ、雲居ニヒマク心地シテ、

身ニシミテゾ覚ケル。箏ノ音ヲ指南ニテ分入タリケレバ、荒タルヤドノ人モナク、草ノミシゲク露深シ。秋モ半ノ事ナレバ、音々スダク虫ノ音ニ、琴ノ音ゾマガヒケル。サレバ君ノ御事、深ク恋マヒラセラレケルニヤト、誠ニ哀ニ覚ケレバ、腰ヨリ横笛ヲ取出テ、忍ビヤカニゾ付タリケル。小督局笛ノ音ヲ聞付テ、浅増トモ云計ナシ。忿琴ヲ弾サシテ、取ヲサメ給テケリ。仲国モ箏ノ音聞ヘズナリケレバ、笛ヲモ吹サシテケリ。サテシモ可有一事ナラネバ、兼テ聞ツル片織戸ニ立寄テ、門ヲホトくト打タ、クニ、トガムル人モナシ。

(第三本。上巻五八七頁四く一二行目)

延慶本では虫が重視されていること、小督の来客拒否の気持ちがよりいっそう鮮明であることなどから、むしろ『秋月物語』との距離が大きくなっているのではなからうか。しばらくして対応した女房が、

十二三計ナル女

(同前一五行目)

サキノ女

(五八八頁五行目)

のように「女」と呼ばれていて「小女房」とは呼ばれていないのも、『秋月物語』との相違点である。

「伏し拝む」という複合動詞は、

(平維盛は) 藤代の王子を初として、王子くふしおがみ参り給ふ程に、

(巻十「熊野参詣」)

のように、目の前の宗教施設を拝むのが普通であろう。ところが、『平家物語』では二つ、数え方に拠っては三つ、およ五百キロ離れた遠くを「伏し拝む」という例がある。

まずは、富士川の戦いの場面で、源頼朝を主語とする「伏し拝む」である。

兵衛佐馬よりおり甲を脱ぎ、手水うがいをして、王城の方をふしおがみ、「これはまったく頼朝がわたくしの高名にあらざ、八幡大菩薩の御ばからひなり」とぞの給ひける。

(巻五「五節之沙汰」)

平家が置き忘れた鎧を持つてくる部下が居り、又、平家が捨てた大幕を持つてくる部下も居り、敵が逃げ出したという報告が間違いないことが徐々に明らかに成り、頼朝は感謝の気持ちを込めて都の方角を拝んでいる。富士川から見ると都は五百キロには及ばないが、数百キロ西である。

第二例は、壇の浦の戦いの場面で、安徳天皇を主語とする「伏し拝む」である。

ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしおがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば、  
(卷十一「先帝身投」)

壇の浦から見て伊勢はおよそ五百キロ東である。この二行は、灌頂巻の「六道之沙汰」の章段でもほぼそのまま繰り返されている(四〇五頁八〜九行目)。

『秋月物語』の用例は、本拙稿第一章第一節のあらずしのIVの場面で、中将を主語とする「伏し拝む」である。琴の演奏者が愛敬の姫君であることが徐々に明らかに成り、冠者に化身して畿内から旅の道連れになってくれ九州上陸後は愛敬が身を寄せている家を指さして教えてくれた清水観音に感謝の気持ちを込めて、都の方角を拝んでいる。秋月から見て都は約五百キロ東北東である。今回は、敢えて室町大成の表記のまま、掲出することにした。

……………姫君の琴のねをきく事の、ふしきさよ、ちかふ所もなし、いかせん、うれしさよとて、涙を  
なかし、都のかたを、ふしおかみ給ひて、かくそ、ふき給ふ

みやこより、あいきやうを、尋きて、恋し、ゆかし、うらめしや

(室町大成第一卷一八七頁上段六〜二行目)

『秋月物語』だけを見て判断すると、中将の頭の中に「あいきやうを、尋ねる身づからの旅の行程が蘇り、その出発点である都のほうを向いた、と解釈してしまいそうだが、そうではなく、清水寺のほうを向き、その寺が旅の出発点である都にあるからこそ、身づからの旅の行程が頭に蘇り、「みやこより、あいきやうを、尋きて、恋し、……」という感情が進り出るような和歌が詠まれたのである。

『平家物語』には連銭茸毛の馬が登場する頻度が高い。

○足利は、朽葉の綾の直垂に、赤皮威の鎧着て、たか角うったる甲のをしめ、こがねづくりの太刀をはき、きりうの矢負ひ、しげ  
どうの弓もつて、連銭茸毛なる馬に、柏木に耳づくうったる黄覆輪の鞍をいてぞ乗ったりける。あぶみ踏んばり立ちあがり、大音  
声あげてなのりけるは、……  
(卷四「宮御最期」上巻二四四頁)

○(平維盛は)赤地の錦の直垂に萌黄威の鎧きて、連銭茸毛なる馬に黄覆輪の鞍をいて乗り給へり。

○奥の秀衡がもとより木曾殿へ竜蹄二疋奉る。一疋はくろ月毛、一疋は連銭葦毛なり。やがて是に鏡鞍をいて、白山の社へ神馬にたてられけり。

(巻五「富士川」。上巻三〇二頁)

(巻七「俱利迦羅落」。下巻一九頁)

○(斎藤別当実守は)赤地の錦の直垂に、もよぎおどしの鎧着て、くわがたうったる甲の緒をしめ、金作りの太刀をはき、きりうの矢負ひ、滋藤の弓もって、連銭葦毛なる馬に、黄覆輪の鞍をいてぞ乗ったりける。木曾殿の方より、手塚の太郎光盛、よい敵と目をつけ、……

(巻七「真盛」。下巻二四頁)

○魚綾の直垂に、火おどしの鎧着て、連銭葦毛なる馬に、黄覆輪の鞍をいて乗ったる敵のまっさきにすゝんだるを、「こゝにかくるはいかなる人ぞ、名のれや」と言ひければ、「木曾殿の家の子に、長瀬判官代重綱」と名のる。

(巻九「宇治川先陣」。下巻二二四頁)

○熊谷次郎直実、「……あッばれよからう大將軍にくまばや」とて、磯の方へあゆまるところに、ねりぬぎに鶴ぬうたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、楯形うったる甲の緒をしめ、こがねづくりの太刀をはき、切斑の矢負ひ、しげどうの弓持って、連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍置いて乗ったる武者一騎、沖なる舟に目をかけて、海へざつとうちいれ、五六段ばかりおよがせたるを、熊谷、「あれは大將軍とこそ見まいらせ候へ。……」と扇をあげてまねきければ、

(巻九「敦盛最期」。下巻二七四頁)

このように連銭葦毛の馬には、巻七「俱利迦羅落」の用例を別として、黄覆輪の鞍が置かれることが多い。なお、『太平記』にも連銭葦毛の馬が登場するが、一例のみであり、しかも黄覆輪の鞍は置かれていない(『太平記』は新全集に拠った。巻二十八「阿保秋山四条川原合戦の事」。第三分冊四〇八頁)

そして『平家物語』では、黄覆輪の鞍と連銭葦毛という組み合わせは、最期の晴れ姿だったり、大將軍のものだったり、敵に大物だと思わせたり、なにかしら、その武士の晴れ姿として用いられる傾向があるように思う。

『秋月物語』の、本拙稿第一章第一節のあらすじのVの時期、中将は、太宰府の大式に、身づからの上京の準備をさせるべく使者(真野十郎)を派遣するのであるが、その使者の乗っていた馬も、普通の馬とは違う特別の華やかさがあつた、と解釈すべきであろう。こ

こでも、室町大成の表記のまま引用したい。

……れんぜん足けの、走<sup>はり</sup>一なるに、金ぶくりんの鞍置て、むちをあて、急ける程に、其暮かたに着にけり

(一九九頁下段三〜五行目)

『平家物語』以外の先行諸作品に目を向けた場合、特定の語の用例がその先行作品に豊富にあつて、かつ、その全用例から帰納的に語の性格を導き出せたとしよう。それでもなお、その性格を『秋月物語』の当該語の解釈に利用していいかどうか、多少の不安は残る。それに対して、『平家物語』から導き出される語の性格を『秋月物語』の当該語の解釈に利用するのは相当学問的な手続きと言うことができる。

本節では、その一端を述べた。

### 第三章 『平家物語』享受史に関する若干の蛇足

『平家物語』はどちらかと言えば近代に入つて脚光を浴びるようになったと言われる。もし、『平家物語』投影が前近代の御伽草子というジャンル全体に見られる現象としたら、多少なりとも、『平家』享受史が塗り替えられることになるが、それはどうであろうか。私は『秋月物語』と同じタイプの御伽草子——というのは、主として松本隆信氏「擬古物語系統の室町時代物語(続)」——「伏屋」「岩屋」「二本菊」外——<sup>17</sup>で触れられている継子いじめ型御伽草子及び松本氏「擬古物語系統の室町時代物語」——「しぐれ」「若草」「桜の中將」「志賀物語」外——<sup>18</sup>で触れられている嫁いじめ型御伽草子であるが——の中で、作品全体の特徴として『平家』投影の色濃いものは、今のところ、見出してはいない。今後どなたかにご教示頂ければ幸いである。しかし、もし今後も見い出せないとしても、『秋月物語』が同じタイプの他作品と同調せず独特の豊かさを持っているということを考える意味で、『平家物語』投影という現象は看過できないのではなからうか。

強いて一つ挙げれば、『緑弥生』がある。<sup>19</sup>

『緑弥生』は松本氏の二つの論文で取り上げられている諸作品と同じタイプに属することは明らかである。この作品には、『平家物語』の語彙語法を熟知すれば理解が深まるような箇所が随所にあるが、特に、私の注釈書では三十一の段落に分けた、その三十一番目の段落で『平家』が引用されていることは疑えまい。ところが、厄介なのは、『緑弥生』が嵯峨天皇御治世の八〇九く八二三年とその少し後に時代が設定されている点である。『秋月物語』も白河院の頃（一〇八六年く）に時代が設定されている<sup>20</sup>から、『平家物語』引用を公然と行うわけには行かなかったであろう。同じ性質の厄介さは、擬古物語（別称・中世王朝物語）『白露』に於ける『徒然草』の投影を発見する際にもあった。『白露』（南北朝後期く室町初期）は『源氏物語』の直前の頃に時代設定されているから、兼好という名前を出したり『徒然草』の詞章とすぐわかるような詞章の引用の仕方はされていないのであるが、それでも、『徒然草』の真骨頂をいち早く見抜き自作に取り入れていったのが『白露』作者なのであった。<sup>21</sup>

『源氏物語』が文学史上確固たる地位を保つようになったのが藤原俊成・定家の頃かそれ以降かとして、そのようなある種の權威に基づいて『源氏物語』を称揚する読者は、紫式部にとつて、有難迷惑な存在である。そのような有難迷惑な読者千人よりも、藤原俊成親子よりも前に、身づからの目で『源氏』を愛読した菅原孝標女のような一人の読者のほうが真の読者と言える。

『徒然草』は江戸時代に入って爆発的に流布したが、兼好法師にとつて、同時代人の尻馬に乗って称賛する江戸時代人百人よりも、室町時代前期までという早い時期に身づからの目で『徒然草』を読んで作者の意を損ねないような引用の仕方に取り入れた『白露』作者という一人の読者のほうが大切な存在だったであろう。

同様に、『平家物語』に日本を代表する傑作としてのある種の權威が備わる前の時期に、身づからの目で『平家物語』を読みこなし、その文学的魅力を損ねないような引用の仕方で作成に取り込んだ御伽草子作者が居た、という事実は、たとえそのような御伽草子作者が一人かそれに近い人数だったとしても、『平家物語』享受史上特筆に値すると思うのである。

注

- 1 渡邊重紀氏「黒川文庫蔵『小督物語』解題・翻刻・影印」。『実践女子大学文芸資料研究所年報』第三号、平成一四年。
  - 2 『室町時代物語大成』所収の『秋月物語』の底本は、高山歆喜寺蔵本である。
  - 3 大岡山書店、昭和一七年。
  - 4 『和漢朗詠集』第二三五番参照。
  - 5 『秋月物語』一九二頁下段一五〇一六行目。
  - 6 『平家物語』の引用は、岩波書店発行新日本古典文学大系に拠る。以下、この叢所の名称を新大系と略すことがある。新大系の底本は一方流（一方系）の高野本である。新大系は、□底本の振り仮名は片仮名で残し、□校注者が付した振り仮名は平仮名で残し、□底本が仮名で記されているところを漢字に直した場合もとの仮名を（□）に入れて振り仮名の形で残す、という方針を取っている。本拙稿では、□、□の振り仮名を新大系と同じく、それぞれ、平仮名、片仮名で付しながら、引用する。
  - 7 八坂流（八坂系）のうち中院本については、今井庄之助氏千明守氏『中院本平家物語』（三弥井書店、平成二二（二三年））に拠った。底本である国会図書館蔵慶長古活字版中院本の区切り点は、編者の判断で、読点に直されている。行末、丁末を示す符号、他本との異同等は本拙稿では省略した。城方本については、『国民文庫刊行会編『平家物語 附承久記』（国民文庫刊行会、明治四四年）に拠った。
  - 8 市古貞次氏編『高野本 平家物語』10（笠間書院、昭和四九年）。
  - 9 『国文学解釈と教材の研究』第三卷一六号、昭和五三年一二月号。
  - 10 物語の視界50選の中の一論文。『国文学解釈と鑑賞』第四六卷第一号、昭和五六年一二月号。
  - 11 『没落貴族の見果てぬ夢』、『戦国乱世の文学』（岩波書店、昭和四〇年）。初出は『文学』昭和三九年七月号。
  - 12 『秋月物語』小考——その特色をめぐって——。『東洋大学短期大学紀要』第一号、昭和四五年三月号。
- なお、真下美弥子氏の『伏屋の物語』から『秋月物語』へ——『住吉物語』との関わりを中心として——（『論究日本文学』第五三号、平成二年五月）の注②では、佐藤りつ氏『秋月物語』考、『秋月物語』続考（『東洋短期大学紀要』第一号、昭四五・三および第二号、昭四六・一）という形で、真下氏『秋月物語』考——作製の背景と方法——（『伝承文学研究』第三九号、平成三年五月）の第三節の注②では、佐藤りつ氏『秋月物語』考、『秋月物語』続考（『東洋大学短期大学紀要』一および二一九七〇・三および一九七一・一）という形で、佐藤氏の二論文が紹介されている。私は、これに教示を得て、佐藤氏の論文を読むことになった。しかし、佐藤氏の昭和四五年のほうの論文を実見したところ、表題が『秋月物語』小考」であった。

13 『論究日本文学』第五三号、平成二年五月。

14 平成一四年。

15 平成一四年。



- 16 北原保雄氏小川栄一氏編。勉誠社、平成二年。  
17 『斯道文庫論集』第五号、昭和四二年。  
18 『斯道文庫論集』第四号、昭和四〇年。  
19 田村俊介徳田哲詩氏著『緑弥生全訳注』。近代文芸社、平成一六年。  
20 真下美弥子氏『『秋月物語』考——作製の背景と方法——』(『伝承文学研究』第三九号、平成三年五月)の五四頁上段二一〜二二行目及び第二節の注10。  
21 中島正二氏田村俊介著『中世王朝物語『白露』詳注』。笠間書院、平成一八年。

二〇二一年九月一六日提出